

史遊サロン通信

No 262号
平成30年
1月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

明けましておめでとございませう

「史遊サロン」も三年目になります

年賀状を書こうとして、今年も平成最後の年、ちょうど明治元年から百五十年目と気がつきました。ついでに、明治・大正・昭和・平成の年数を調べてみると、おおよそ十五年の単位で、三…一・四…二になっていて、合計で十単位、すなわち百五十年です。

明治維新百五十年として、マスコミでも大きく取り上げるでしょうが、やはり、「歴史に遊ぶ会」として、何かアクセントをつけて見たい気がします。

今月で「史遊サロン」となつてから、ちょうど二年が経過しました。当初、漠然と思っていたことは、「サロン」だから、会費もななく、執筆、講演、出席も自由で、世話人は私一人、何よりも力まず省力型で、三年ほどやってみようということでした。

幸いなことに、従来、専属でお願いしていた「史遊会通信」の事務を、二年半ほどボランティアとして担当していたので、引き継ぎ時には、既に支出した分を除いて六十万円近くの資金がありました。

まず会員の出版を奨励するため、編集や印刷・製本の費用を助成することにして、現在までに六件、二十四万円ほど使用しました。

定例的な費用としては、二年間で、会場費が十二万円、「史遊サロン」の編集・印刷・通信費が八万円、すなわち年間十万円ほど掛かり、現在の残高は十六万円です。大まかには、あと一年余のサロンの運営費分です。

「史遊サロン通信」は、十二号分合計で百二十六頁、サロン出席者数も平均すると十二名ほどでした。

(新井宏)

今年最初の史遊サロンは予定通り第三土曜日の一月二十日です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。なお、三月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の三月十七日です。「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

佐藤健一さんが『和算における日用数学の成立について』の大著を出版されました。

A4版で二八二頁です。史遊サロンの出版奨励として印刷・製本のお手伝いをいたしました。

- 主な構成内容は次の通りです。
- 第一章 飛鳥・奈良時代の数学(16頁)
- 第二章 平安時代の数学(11頁)
- 第三章 鎌倉時代及び室町時代の数学(54頁)
- 第四章 江戸時代初期の数学(49頁)
- 第五章 日用数学の成立(88頁)
- 付録 参考史料(36頁)

NHK平成二七年一〇月放映の

「歴史秘話 ヒストリア」

「聖徳太子の実像」について

隆 恵

番組の内容はおおむね次の通りであった。

① 全体としては、聖徳太子の河内での活躍説を取り上げていた。

四天王寺の建立、狭山池の新設など。

② 近年は、聖徳太子像を虚像とする風潮だが、そうではない。

十七条憲法制定や冠位十二階制定等の沢山の改革を行った。

③ 六〇〇年の遣隋使を是認し、皇帝とのやり取りは別として、記紀の無視を疑問としていた。

④ 聖徳太子の尊号の付与は、馬子と聖徳太子の治世の良さを是認して、後世の天智・天武・持統あたりから始まった。

⑤ 法隆寺の釈迦三尊や救世観音は伝承通り、聖徳太子の実像を復元したものである。

⑥ 聖徳太子は、隋の使節に倭国の文化を知らしめるべく、難波から飛鳥に至る四車線道路の規模の大道を建築した。

⑦ 母親・妃・本人がわずか二か月以内に死亡した原因は、伝染病であろう。

⑧ 有名な「聖徳太子と二王子の肖像画」の作成時期や、聖徳太子の絹製の棺の作成時期は、奈良時代の中頃、即ち聖徳太子礼賛が起きたころである。

私のかねての持論を整理する。

① 聖徳太子は、播磨の国(兵庫県)の開拓、半島の百済・伽耶や中国の隋との交易や外交、並びに九州や中四国との主要ルートの瀬戸内海、並びに淀川上流との交通の利便性から、「山間地で不便な飛鳥」を捨て、根拠地を難波とその中間に位置する斑鳩に移した。

② 政治の中心地を飛鳥から難波にシフトさせたのは、最大の権力者の蘇我馬子である。遣隋使の第一回の派遣を六〇〇年に行うが、この事実を日本書紀は無視している。

この無視の理由は、隋書によると倭国使節の皇帝への口上に、「倭国の王の名は、アメノタリシヒコ」即ち男の王だと記録されている。

書紀では、この時の大王を推古女帝としているので、書紀の欺瞞が露呈するので割愛したのである。

この男王は、蘇我馬子だったのかもしれない。聖徳太子説もある。

蘇我馬子の大王説を唱える異端説があるが、私はそれに賛同はしない。

そこまで決めつける根拠が見つからないからである。

この「アメノタリシヒコ」との倭国使節の口上は、女王を戴いている国では隋から侮られるので、使節が嘘を言った可能性も否定できない。

また後世になるが、室町幕府の第三代將軍の足利義満は、中国の明との貿易欲しさに明の皇帝からの「日本国王 源道義」の称号を黙認した。

真の国王は天皇であるにもかかわらず、また明の皇帝から「王位」を下賜されるといふ属国扱いの屈辱を忍んで、利益欲しさから受容した。

義満は、国王を僭称する気はなく、実質の最高権力者だから黙認したのである。馬子の場合も、使節は「馬子こそ真の最高権力者と言う認識」があったので、そのような返答をした可能性もある。

③ さて、難波中心主義の馬子に賛同したのが、弟の境部摩理勢、次男の倉麻呂、甥の聖徳太子であった。

これに対して飛鳥に拘ったのが、長男の蝦夷や推古や田村王子（後の舒明天皇、天智天皇の実父）たちであった。

④ 聖徳太子の実母が亡くなり、その二か月後に聖徳太子の亡くなる前日に妃が死亡するなど、何かきな臭さを感じる。

全くの憶測になるが、蝦夷一派の毒殺か殺戮があったのかもしれない。

山背大兄王子に対する蝦夷と入鹿親子の二代に亘る憎しみの原因は、聖徳太子と蝦夷の軋轢が遠因だったのかもしれない。

なお、疫病説も否定しないが、この疫病を伺わせる記録はない。

⑤ 現法隆寺建立の発案者は誰か。

敗軍の将で豪族たちの支持を失っていた天智に、近江京を建設したばかりであり、更なる金と労役の浪費を、豪族たちに強いることができたであろうか。

天智の発案ではなく、斑鳩寺の僧侶と民が金堂と仏塔の建設を行ったのではないか。

⑥ 山背大兄王子亡き後、斑鳩寺の後ろ盾がいなくなったが、孝徳王朝の左大臣の阿部氏の支援で領地と民を与えられた。

この阿部氏は、四天王寺にも仏像を寄贈したとあり、聖徳太子一族の影の支援者だったのかもしれない。

ところが、後年天武天皇はこの民と領地を召し上げた。

⑦ 後援者のいない斑鳩寺は廃れるしかなかったが、今日見るような大伽藍の大寺になる。誰がこの財政援助をしたのか。

恐らく、はるか後世の奈良時代の持統・文武・聖武天皇、更には光明皇后が義母の宮子と夫聖武天皇の病氣快癒を祈願して、法隆寺をバックアップしたのであろう。

⑧ 光明皇后は、東院伽藍を建設し、金堂に安置されていた救世観音を新設の夢殿に移設して、金堂には新しく作った薬師如来を安置したと想像する。

恐らく、中宮寺を建立したのも光明皇后の鶴の一声だったのではないか。以上

本邦の紀元三・四世紀の年輪年代

説明に向けた新事実

高橋 正彦

【A 緒論】

本邦古墳時代の創成期の纏向遺跡（推定「邪馬台国」の、勝山古墳やホケノ塚における年代の解明こそが遺跡群の本質解明のキーポイントである。その年代推定の基礎となる、——【本邦年輪年代に信憑性があるか】更には、【炭素年代の基礎となる欧米の年輪年代は、確立された絶対年であるか否か】——は、最も重大な論点であるが、是に付いて正面からの論及はない。

ところで私は年輪論の時系列は部外検証し難く、寧ろ、年輪の長期スパンにおいて【標識となる特異点の検出の可否が、信憑性決定の枢要である】——と考える。

具体的には紀元五三六年＝世界的極冷年、は重大な標識年であるとの再確認に至った。

——今回はその結論再確認に至る過程を時時記録的手法で述べようと思う。——

【イ 端緒】本邦年輪年代・酸素同位体年代法は「トンデモ論」でないのか

最近邪馬台国に言及する奈文研の年輪年代（a）・地球研の酸素同位体年輪年代（b）は、盛んにジャーナリズム上でアピールするが、共に基礎標準データを公開せず、大衆受けのみを狙い相当に胡散臭いと思っていた。

●しかし本年十一月に至り、紀元七七六年の爆発的宇宙線降下を指標とし、(a)(b)年輪年代には一年の乖離があるとの説が出た事を知った(箱崎真隆 1916年)。

【ロ b説に紀元五三四四年の】

特異点Ⅱ図3を含む事を発見】

b説の信憑性に関しその周辺を探るうちに、
b説(酸素同位体年輪年代)による難波宮の柱根の伐採六一二年確定発表(地球研 News Letter, No. 11.4.2014)に気がついた。

酸素同位体年代法の手法とは——高野慎の柱根のコアを抽出し、その年輪セルロース中の $\delta^{18}O$ 比を時系列表記し、酸素同位体の【標準年輪時系列】と対比し年代を決定する。酸素同位体値は雨量、或は気温の多寡の指標データと解されている。

本人は気付かないが、図3の五三四年値は、前後数百年に比べ異常に高く、その後大きく下がる。是は世界レベルにおける五三六年寒冷スパイク現象の前年の状況に相通じる。(前年は異常に高く、直後急冷する—図2)

但し、仮に酸素同位体値が気温とした場合、年次に一年の乖離がある。

——そこでこれらの事情を確認するため世界レベルのデータを確認したところ極めて困った事態にぶち当たった。

【ハ 違うだろロシア%——旧説の】

寒冷スパイク年を一年ズラすとは】

●五三六年に急激な気温低下があったとするのはSweden 北緯、Finland, 西 Siberia 2地点(Yamal, Taimyr) じゃぬ。(Briffa 2008 によ

る)。是に付随し Sidoroba (2007) は Taimyr 地方のカラマツに関し、同様五三六年の特異寒冷年(=寒冷スパイク年)を明瞭に示した。ところが Sidoroba 2015 では、図1の通り、是を實質的に五三七年に変えていることを知った。

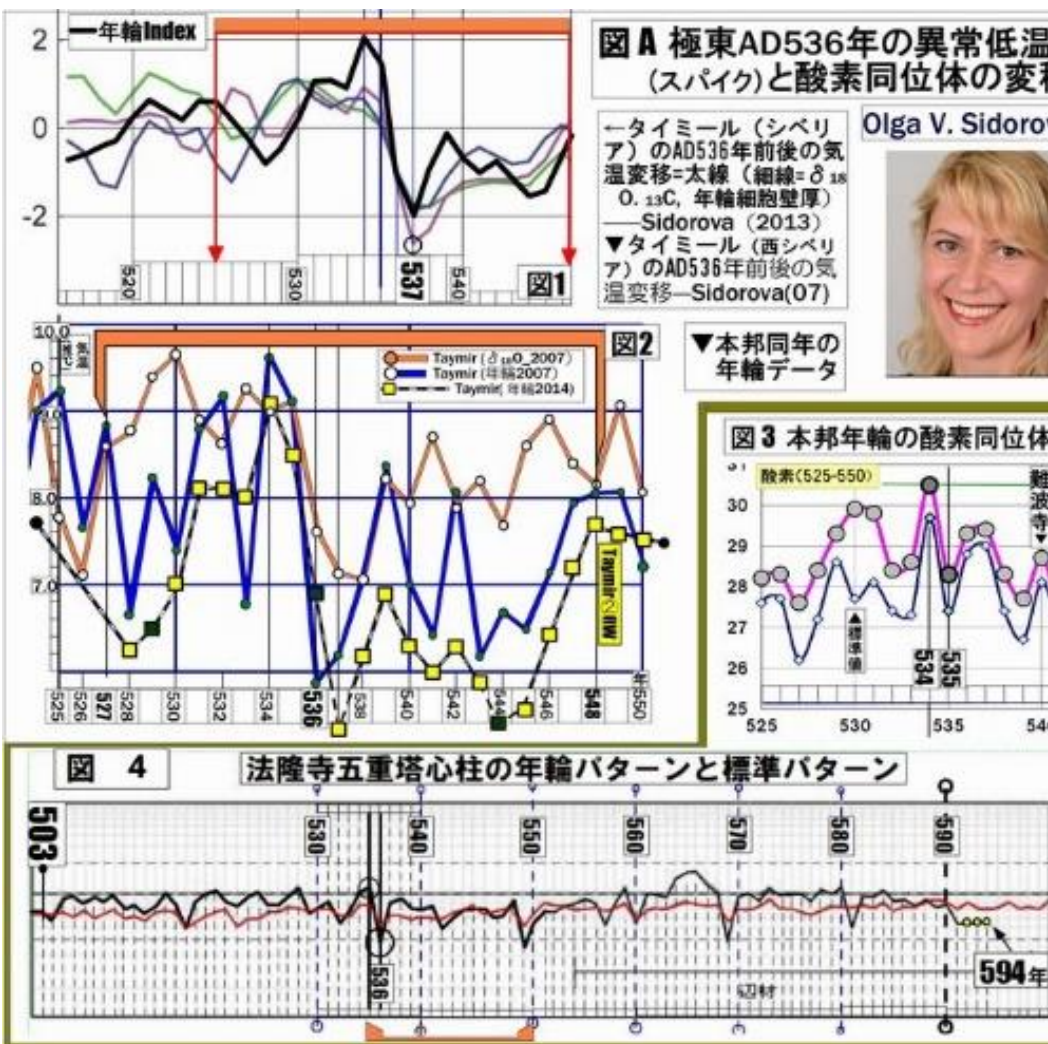
——寒冷スパイク

ク五三六年説にとり、是は困るし、『違うだろ%』
Sidoroba 2015
を改め調べた。

【ニ Sidoroba はやばい】

二〇一五年論文で Churakova (Sidorova)とある

事から、もしや女性かと気付き調べたところ、少し以前はポスドクで露からスイスに移籍し、写真・メルアドも公開している事を知った。本邦の小保方的存在の様である(図3)。女性の場合、抗争性(徹底的追求性)が無い恐れがある。



——それは次の通り二〇〇七年の Taimyr 年輪データは自前データではなく指導教授 (Vaganov = Siberia 州立大前学長) 等による。年輪よりは炭素・酸素同位体専門と思われる。

手を広げすぎ、法則性掌握に至っていない観がある。

● 実は一五年・〇七年データの年輪変移の相関性が見落とされている。図2の鎖線は図1の太線(年輪 \parallel 気温)を移した物であるが、五二七 \searrow 五四〇の一四年に限ると、相関していないのは3箇年に限る。また〇七年図において、引用年輪の総サンプル数は一四点、その総計を以て、Yaganovの原著は五三六年に低温特異点ありと明記している。採標点はN \parallel 七二度地点。前者では一八〇と年輪(気温)との間に明確な相関はなく、更に五三六年の特異点に対し、一八〇の谷は二年遅れの乖離がある(図2)。

(是に \rightarrow 対し、Sidaroba \sim 15年のサンプルはN \parallel 七〇度地点で場所が違う、点数は非明記 \parallel 曖昧)
この項の直観として、西シベリアに寒冷スパイク五三六存在の否定は弱い。

【B 諸条件の調整】

本論の着想は紀元五三六年の極寒冷スパイク年が、本邦にも及び、是が本邦年輪年代の信憑性をもたらし、逆に世界レベルの五三六年説の信憑性を高めるとする事である。この作業の要素となる年輪年代を検討する。

【イ】 法隆寺年輪年代の確認

以前、法隆寺・心柱の年輪年代には、五三六年の世界の極寒冷の影響がみられる。但し一年の乖離があるとした。然し状況が変化した。

光谷の年輪パターンを詳細再確認したところ、原表の罫線が不均等に残るものがあり(一般の光谷パターン図では是が消去されている)、是を基に年代を再確認した(図3)。

この結果、本邦寒冷スパイク年は、従来の解釈からずれて、紀元五三六年となった。光谷の年輪年代は標準パターンの基本データを殊更に開示せず、茲からともすれば一〇〇年のミスマッチがある等とされたが、今回の再確認により、少なくとも五三六部分には意味がある事となった。——状況は大きく変わった。

【ロ】 酸素同位体年代の確認

中塚武の酸素同位体年輪年代も、同様に基本パターンの作成過程を開示せず、極めてトンデモ説的な印象がある。(然し現実には国立大学法人「地球環境研究所」を組織するに至った。)その説の基本性格は「標準年輪パターン」の構成過程を明示せず不明瞭である。

然し、難波寺の酸素同位体年代(二〇一四)を知るに至り状況は大きく変わった。

——中塚氏は、パターンの本質に自覚はないが五三四年の値は、実は、前後数百年を通し非常に高い位置にある(図3)。この様な高い位置(高気温)から、急激に寒冷化に落ち込むのが年輪における北欧露の五三六年の寒冷スパイクの特色である(図2)。

そこで、若し酸素同位体の五三四年頃の乱高下が、世界的五三六年寒冷スパイクと同調しているとするならば、これ等の変移には相互に相対的信憑性がある事になる。

——但し、酸素同位体年代に二年の乖離がある事を認めればの話ではあるが。

【ハ】 酸素同位体年代の確認手順

これ等信憑性確認の為には、難波寺柱根の年輪に世界的寒冷スパイクの痕跡の発見が年輪年

代問題の重要ポイントである。普通は同位体検査を行う前に、年輪幅の検査及びクロスデーティングを行うのであるが、中塚氏側にデータはないのであるうか。——一応は「年輪幅に異常な点がないか」との曖昧な打診はしたが、勿論返事はない。

【C (本邦年輪問題の)展望】

奈文研の年輪パターンには、不明瞭操作が疑われる。この不明瞭を解く条件は、次の3点である。

① 本邦の桧の年輪パターンには、世界規模の寒冷スパイクが顕出しており、——【その年代を紀元五三六年とする】

② 同様の寒冷スパイクが酸素同位体による年輪年代パターンにも見られる。

③ 五三六年の寒冷スパイクは北欧・露はじめ世界規模の異常現象である。

②は未確定であるが、①の年輪変移と同調していることが直観される。①②同調が顕現した場合、相互にその信憑性を保証する事になり、その影響は計り知れない。更には③の五三六年の現象が相当広汎な現象である事を証明する事となる。

また近々の問題として、冒頭に掲げた纏向遺跡年代に年輪実年代(明確な足掛かり)を与える事になると予想される。

(今回は年輪問題の将来的展望に至る、重要なキーポイントの発見・論点の決定に至る直観的判断等の状況を時事的に述べる事に留意した次第です。17.12.29)

「ロシア革命 破局の八ヶ月」

池田嘉郎著 岩波新書

中島 茂

周知のように、ロシア革命では一九一七年二月（露暦）帝政政府が倒れ、ついで政権を担った臨時政府も同年十月（露暦）レーニンひきいる武装蜂起で打倒された。

著者はこれまで低く評価されてきた臨時政府の苦闘の八ヶ月に焦点をあて、「なぜ臨時政府は挫折したのか」そして「なぜポリシェヴィキは成功したのか」という二つの問いを立てるが、その答えは一つであるという。

「臨時政府の苦闘と失敗の背景には、自由主義エリート層と貧しい民衆（農民）の隔絶した社会構造がある」との著者の指摘に私もまったく同じ思いである。

ロシア史をさかのぼって十八世紀後半、ロシアを統治したエカチェリナ二世（ドイツ出身）は啓蒙専制君主の典型とされるが、彼女の治世はロシアの農奴制が確立された時代でもあった。

フランス語を自在に話し、フランス文化に心酔する宮廷貴族層と、人格的自由をもたない農奴との間には越えがたい隔絶があった。

一八六一年の農奴解放後も、民衆の側からみた「われわれ」と「あいつら」という隔絶は、基本的には変わることなく続き、議会制度など民衆の意思を組みこむ仕組みが育たないまま、ロシア帝国は第一次世界大戦に突入し、ついに一九一七年の破局を迎えるに到る。

このころの状況を著者は「底の抜けたロシア」という。

大戦中の経済の混乱、社会秩序の解体、戦線でのあいつぐ兵士の脱走等、ロシアはもはや国家としての体を失いつつあった。

二月革命後に成立した臨時政府はさまざまな努力を重ねたが、言論の自由や私有財産の保護などに立脚する西欧型の国家を確立することができなかった。

ロシアの歴史の負の遺産は余りにも重かったのだと思う。

臨時政府の弱点、不徹底につけいった急進社会主義者のポリシェヴィキは、民衆の中にしだいに影響力を強め、ついに武装蜂起に成功した。

権力を掌握したかれらはドイツ側と講和して戦線を離脱し、ときには容赦なく民衆を弾圧し、社会主義体制を押し進めていった。

大義のためには手段を選ばないレーニンの非情、冷徹さが印象深い。

著者の臨場感のある筆致は登場人物の個性を活写し、読者を引きずりこんでいく。

また四次にわたる臨時政府に関わった三十人の閣僚のうち、余生を全うしたのはフランスからアメリカへ亡命した最後の首相ケレンスキーただ一人であった。

革命の過酷さを物語って余りある。

一九九一年、ソビエト連邦が消滅し、強権的なプーチン政権のもとで、社会主義の理想が色あせて久しい今、ロシア革命を考える意義はどこにあるのだろうか。

四月二十八日付「静岡新聞」夕刊の記事の中で、著者はこう述べている。

「急進的な社会改造は結局一人一人の人間の軽視につながっていく。実情に合わせ、人々が折り合える制度をどのようにつくっていくか。ロシア革命から学べることは多いと思います」。

最後に私事になるが、著者の父君故池田嘉男氏は私の西洋史学科の同級生であった。

氏は平成十一年三月、千葉大学での退官式のさ中に倒れ、急逝された。痛恨の極みであった。

私は氏との四十年をこえる交流を想起し、深い感慨をもって本書を読み終えた。

平成二十九年十一月二十日記

出雲大社再考 (一六)

日本伝統文化発祥は出雲か (2)

歌舞伎始祖阿国は大社の巫女

村上 邦治

相撲は日本の国技といわれるが、代表的伝統芸能という点、歌舞伎であることに異論は

なからう。歌舞伎の歴史書は多くあるが、創始したのは、お国が慶長八年(一六〇三)京で、男装してかぶき者(独特の鬢髪を切り下げ、派手な衣裳に大太刀を差し異様な恰好をした者)の姿で、女装した男が演じる茶屋の女と戯れる有様を、歌と踊りを交えて演じたのを嚆矢とすることで一致している。これまで、ややこ踊りや念仏踊りは盛んであったが、歌をうたい、茶屋のおかみを口説く寸劇を見せた。これが新しい芸能として「かぶきおどり」とよばれ、人気を博したのである。

これを具体的に記した唯一の史料が『当代記』という徳川幕府草創期の出来事を記した書物である。その中に、

「このころかぶき躍という事有り。是は出雲国神子女(名は国、但非好女)仕出、京都に上る。例えば異風なる男のまねをして、刀脇差衣装以下殊に異相、彼の男茶屋の女と戯る

体有難くしたり。京中の上下賞翫する事斜めならず、伏見城(家康)へも参上し度々躍る。其後これを学ぶかぶきの座いくらも有りて諸国へ下る。但江戸右大将秀忠公は終に見給ず」と、記されている。史料としては後年記述された箇所もあり、注意が必要であるが、当時の記録が少ないだけに重宝されている。

この記述に基づき、阿国が歌舞伎の創始者としてゆるぎない地位を得たのであるが、問題は「出雲国巫女」と記されており、阿国が果たして「出雲(大社)の巫女の出身であった」か、否かである。

この史料からは、出雲大社の巫女と思えるが、歴史学者からは異説が多い。

現在の主流は、京畿内の芸能座でありながら、地方出身を称したものもあり、出雲の阿国も京畿内の座の、仮の名乗りとするものである。この説は芸能が大成するには、権力者(朝廷、秀吉・家康など天下人)と結びつき、その支援が必要であり、芸の土壌の広がり重視することから、唱えられるものである。

林屋辰三郎は大和興福寺に隷属する座衆であったとする。興福寺多聞院の史料に加賀国の童が天正一一年ややこ踊りを披露し魅了し

たとの記述に基づく。しかし反対説は、かぶき踊りの阿国と同一人かは不明であるとする。また出雲と言っても、京都の出雲路出身説(古川清)もある。

無論出雲国出身説も『当代記』の外、公卿の記録の中に、「雲州のヤヤコ躍一人はクニと呼び」の記述から、出雲大社の巫女とは断定できないものの、出雲で芸能の仕事をしていた女(巫女と呼んだ)と主張する。

出雲には芸能基盤がないということから、京都や奈良出身説が出てきたが、もともと出雲大社では、鎌倉期に舞楽が巫女により奉納されており、永く中断していたが元禄に三〇〇年ぶりに復活させている。また出雲神楽が、神話を題材に舞う伝統が継承されていた。また慶長一四年(一六〇九)豊臣秀頼を願主として本殿の建立がされており、社殿建立の勧進興行の一環と思えなくもない。

こうしてみると、歌舞伎の創始者阿国の出身は、出雲大社の巫女としても矛盾はないのではなからうか。

(この項おわり)

参考文献

『歌舞伎の歴史』 歌舞伎学会 雄山閣出版

『出雲のおくに』 小笠原恭子 中公新書

『歌舞伎の歴史』 今尾哲也 岩波新書

今年読んだ本の中から

平山善之

西鋭夫『新説・明治維新』

ダイレクト出版 2016・4

維新後一五〇年、明治維新を再評価する本が出てきた。この本はスタンフォード大学の西教授の講演録である。教授は「維新を美化してはならない。イギリスが日本人同士を戦わせ、欧米文明に日本を従わせたものに過ぎない」と主張する。「維新日本は欧米の後を追いかけるという劣等感に駆られたまま、好戦的な欧米の帝国主義を模倣しつつ一九四五年度の夏まで疾走する」と。日本古来の美学を壊した戊辰戦争は武器売り込みの結果だという。

やや国粹的だが、従来の明治維新観は薩長政府が形作ったもので、多分に美化されているのは事実であろう。しかし、中国をはじめ、アジア各国が今日なお、国家体制づくりに腐心しつつ成功したと言いつつ、この間違った先人達が偉かったことは間違いない。単に欧米に踊らされたと見るべきではない。欧米模倣は諭吉の「脱亜入欧」論に罪がある。勝海舟は違っていた。いま海舟の論こそ見直すべきであると思はう。

P・ナヴァロ『米中もし戦わば』

文芸春秋 2016・11.

よく現代中国の本質を衝いている。中国は共産党の天下を維持して独裁主義を守ること第一義とし、これを冒す恐れあるものを許さない。その為には何でもありである。表現の自由、報道の自由は全くない。経済・軍事あらゆる面で外国の技術を盗用し相手が弱腰と見るや付けこんで一寸でも対外膨張する。

独裁というのは民主主義より効率的な側面はある。経済発展もその恩恵でここまで来た。しかし、圧政、腐敗、暴力は決して長続きはしないと私は信じている。

筆者は米政府高官の一人で対中強硬派で知られるが最近トランプ政権内で影が薄いという。しかし、オバマ政権、いや歴代米政府の外交失敗が中国をここまでさせたといふべきで現政府も彼を重用しないなら、更に中国の高笑いは続くだろう。「米中戦争の可能性はかなり高い、それ故にどのように防ぐのか」に力点があり、書名に反し軍事的戦略・戦術論ではない。防ぐのは軍事的優位を保つ以外ない。力による安全保障であるとする。

J・ウエルシュ『歴史の逆襲』

朝日新聞出版 2017・5

本書は二十一世紀の世界を四つの側面から切り分け過去の世界に戻りつつある、という。即ち「蛮行への回帰」「大量難民への回帰」「冷戦への回帰」「不平等社会への回帰」である。

冷戦が終わり、未来は非対立の世界を迎えたと考えた人もいた。しかし、民主主義の勝利を誇るどころか新しい難題が起こり、民主主義は衰退の危機に瀕していると著者は主張する。アメリカは「世界の警官」役を降り、トランプは勝手気まま、共産主義は平等社会を標榜するはずなのに中国とロシアの国内に広がる格差のすさまじさ、イスラム世界の混乱と難民、前世紀にまして民主主義は危機的状況にある。

著者(カナダ出身の国際政治学者)は「もう一度歴史を読み直し、世界と自国の両面から突き付けられた難題に社会がどう対応してきたのか、もっと詳しく知っておく必要がある」という。

我々日本人は戦後七〇年間、平和ぼけの状態が続いて来た。だが日本はいまもう一つの回帰、「軍備を持った国家への回帰」、改憲の時を迎えているようである。

世界の独立運動の諸相

内陸国家と海洋国家の違い

新井 宏

いま世界では、独立を求めて「国民投票」を行う地域が数多くある。その中で逆に、内陸的な超大国が、自国に併合した地域を強権で支配しながら、更に軍事力、経済力を背景に、その周辺地域を実効支配しようとする動きが活発である。

最近の独立を求める動きの最大のもの、何と云っても、イギリスの欧州連合EUからの離脱(ブレグジット)を可決した国民投票(二〇一六・六・二三)であるが、その他にもスペインのカタルーニア州(バルセロナ)の独立宣言(二〇一七・九・二七)、イタリアのベネト州(ヴェネチア)等の大幅な自治権要求(二〇一七・一〇・二三)などが相次いでいる。いずれも海に面し、通商により発展してきた歴史を持つ地域である。この点は後述する。

その他の独立運動としてはクルド族の問題がある。主としてトルコ、イラン、イラク、シリアの国境地帯に住むクルド族(現在約三

千万人)は、第一次世界大戦後に独立の構想があったものの一九二三年ローザンヌ条約によつて、その居住地が各国に分割されてしまった。そのため、長年にわたる独立運動が続いているが抑圧されてきた。

ところが、イラクの独裁者サダム・フセインが除かれてからは、北部イラクにクルド人自治区が認められて力を得て、居住地域にあるキルクーク油田がイスラム国家ISに奪われたのを自らの軍事力で回復するほどになった。油田の収益を独立の原動力にしようとするのは当然の流れであり、独立の是非を問う住民投票では、賛成票が九割を超えた(二〇一七・九・三〇)。しかしイラク政府やイラン、トルコ等は、いずれも国土の周辺地をクルド族に割譲することなど問題外と拒絶している。その中で、シリアにおけるイスラム国家ISとの戦いに勝利したクルド人もシリア北部の三県を自治区として固め、独立の機会をうかがっている。

内陸国家における領土問題は、海に開かれた国家とは様相が異なる。たとえば、ローマは最初から世界征服を目指していたわけではなかったが、国の防衛を目指してその周辺国を取り込むうちに大帝国になった。内陸的な

国家とはその周辺部を勢力圏に取り込む本能がある。

今の中国なども漢民族が住む中華の周辺に、チベット自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区を持ち、周辺部総面積は明代の領地(漢民族居住地)に匹敵する。いずれの自治区でも独立運動が盛んであるが、これに香港、台湾を加えれば、中国の周辺部では全て独立運動が起こっているといえよう。

唯一の例外が朝鮮半島であるが、最近中国が朝鮮半島を露骨に属国化しようとしているのを強く感じる。このような周辺地域を確保することによつて、中国は国土の安全を維持している。中国の国境からインドのニューデリーまでわずか三五〇キロメートルしかない。と知るとちよつと驚く。

だから内陸的な超大国は今でも周辺地域への勢力拡張に熱心である。

ロシアはクリミヤをウクライナから分離独立させて併合した上に、東部ウクライナへの影響力を強めている。長年続いているチェチエン問題にも強硬である。そもそもプーチン大統領が出世の糸口をつかんだのがチェチエン紛争の制圧だったのだから無理も無い。日本との関係では、北方領土を本能的に手放さない。

それにも増して、最近中国が朝鮮半島に対して牙をむき出し始めた。

トランプ大統領と習近平主席の最初の首脳会談で、習近平は「朝鮮は中国の一部だった」と主張したと言う。もちろんいくつかの前提条件と修飾語のついた発言であろうが、韓国では反発が強まっているばかりでなく、それ黙って聞いて帰ったトランプ大統領にあきれてもいる。しかし、はたしてトランプの不勉強であろうか。それはむしろ韓国の不勉強だったのではないか。

私が韓国にいた頃、学生たちにしばしば語っていたのは、もしソ連が参戦する前に日本が降伏していたら、あるいは、もし毛沢東と蒋介石が争っていなかったら、「中国は朝鮮を自国領に編入することを強力に主張したはずだ」ということである。

韓国では、朝鮮は常に独立国であったと教えているが、現代の感覚では長期間にわたって、中国の属領であり続けた。習近平主席の話を「一時期、元が高麗を支配したことがある」と軽く理解したいのであろうが、むしろ「李氏朝鮮が中国からの勅使に対し、王が王都の郊外に出向き、自ら三跪九叩頭の礼で迎えていた」ことを想い起すべきである。

「三跪九叩頭の礼」とは、中国皇帝の前で臣下が「跪いて地面に頭を三回つける行為を三回繰り返す礼」のことである。これはもちろん臣下が皇帝に対して行う礼であり、勅使に対して国王が自ら王都の入口まで出向いて行う行為ではない。

清国末期のことになるが英国の外交官も日本の外交官も皇帝の前で「三跪九叩頭の礼」を行うように強要されたが拒否している。

清国の時代には、西藏(チベット)もウイグルも、直轄地としてではなく藩部として現地首長を通じた支配が行われ、伝統的文化の維持が許されていた。それに対して、李氏朝鮮は、名目上は藩部よりも緩い朝貢冊封関係にあったが、実質的には過酷な支配を受けており、自主外交権はなく、毎年、黄金百両、白銀千両の他、牛三千頭、馬三千頭、(美女三千人?)の貢納を要求されるものであった。

いや、つい最近も、韓国の盧英敏駐中大使が中国の習近平国家主席に信任状を奉呈した際、芳名録に「万折必東」と記していたことが問題となっている。

「万折必東」とは荀子の言で「黄河が万回折れ曲がって必ず東に流れる」の意から諸侯が「天子への忠誠」を誓う言葉として知られていた。事実、李氏朝鮮の宣祖が壬辰倭乱

(文祿・慶長の役)の後、明に送った書で「万折必東、再造藩邦」すなわち天子への忠誠を誓い、藩(朝鮮)を再建してくれたことへの感謝の意を伝えていた。留意すべきことは、ここでも朝鮮は自らを「藩」として、後のチベットやウイグルと同様に位置づけていたのである。

中国側のこの認識が、最近の韓国への「三不」要求、すなわち、①米国のミサイル防衛体制に加わらない、②韓米日三カ国軍事同盟に発展させない、③サードの追加配備は検討しない、となって現れている。これでは韓国の自主外交権の完全喪失であるが、外交に未熟な韓国は、交渉経過を曖昧にしてやり過ぎそうとして大失敗した。今や中国は韓国を属国扱いしているかのようである。

一方、超大国の米国は、広大な内陸部を持ちながら、大きく発展したのが海洋国家としてであった。ところが、内陸の州に基盤を持つトランプ大統領が生まれると、内陸超大国の素顔を見せ始めている。まずメキシコとの国境に壁を建設する。万里の長城ばかりでなく、ローマも周辺民族の侵入に備えてフロンティアに「リメス」という長い防塁を築い

た。英国の五〇〇キロメートルにも及ぶハドリアヌス長城もその一種である。

イスラエルも本質的には内陸国家であり、占領地に大がかりな分離壁を設けている。

考えてみれば、周辺を脅かすほどの内陸国家こそが、逆に防塁を築くのに熱心であった。それは中国の歴史に良く現れている。中国は隋、唐を含めて、清に至るまでに漢民族の王朝は宋と明のみで、その他は多かれ少なかれ北方系の征服王朝が続いていた。中国が周辺地を獲得する動機は防衛本能によるところ大なのである。

さて、イギリスのEU離脱(ブレグジット)、スペインのバルセロナの独立宣言、イタリアのヴェネチアの大幅な自治権要求に共通する点は、いずれも海に面し通商により発展してきた歴史を持つ地域であると述べた。

もうひとつの共通点は、経済的に豊かな地域が、現在その豊かさを十分に還元されていないことに不満を持っていることである。

マクロに見れば、欧州連合EUも内陸的な超大国である。海軍力をもとにして世界に君臨した歴史を持つイギリスにとつては、たとえ民主的な組織とは言え、どうしても内陸超大国とは合わず過去の夢を追い勝ちである。

しかしイギリスはもはやEUとは不可分であり、ポピュリズムの行き着くところは、過去の栄光ではあり得ない。

またヴェネチアもバルセロナも十六世紀までは地中海に君臨した強大な海洋都市国家であった。

わずか五平方キロメートルに過ぎないラグーンの小さな島に、十万人が住むのがやっとのヴェネチアが強大な都市国家であったという誇張のように思われるが、アドリア海の主要港を全て植民地化し、更にはエーゲ海のペロポネソス半島、クレタ島、ロードス島、トルコの沿岸諸島まで支配下に置いて、イタリア内にも領地を拡大していたヴェネチアは、東西交易を支配して、トルコにも拮抗できる強国であった。小さな国土のイギリスが、七つの海を支配し超大国であったことを思えばよいであろう。

同じ意味でバルセロナも、イベリア半島、フランス南岸、イタリアの地中海の港を確保し、地中海交易で富を蓄えていた。しかも、地域的にフランス文化の影響を大きく受け、言葉もスペイン語と異なるカタルーニャ語を使い、マドリッドを中心とするカステイリヤよりも優勢であった。しかし、大航海時代に入って力をつけたカステイリヤが大陸か

らの富を独占するようになる、マドリッドの支配下に置かれるようになる。その結果、マドリッドの干渉が強まるたびに、バルセロナが抵抗する歴史が繰り返されてきている。

ヴェネチアもバルセロナも、大航海時代の始まりと共に通商都市としては没落に向かった。西欧の食生活に不可欠とされた香辛料の東西貿易などで巨額の利益を上げていたのが、喜望峰周りの航路に取って代られたためである。しかし、前代に経済的に繁栄していた地域は、その後、文化的な先進地域として生き残る。今やヴェネチアはもちろん、バルセロナも方格都市やガウディのサクラダ・ファミリア教会などで、世界最大級の観光都市となっている。

このように、イギリス、バルセロナ、ヴェネチアの独立志向は、いずれも内陸的な国家や地域からの独立を目指す共通点がある。しかし過去の夢を見て、その付け根となっている内陸から離脱しようとするポピュリズムは、やはり時代錯誤である。

バルセロナの独立の動きを振り返って見ても、独立を主張する勢力は決して多くなかった。二〇〇六年にスペイン中央政府にカタルーニャ自治憲章を要求するまでは、独立を支

持する住民はほぼ二〇パーセントで推移していた。ところがこの自治憲章が、二〇一〇年にスペインの国会と憲法裁判所によって否認されると、独立派の支持率が一気に高まった。ポピュリズムというものはそんなものである。

その一方で、いままでしばしば話題となっていたスペインのバス独立運動、イギリスの北アイルランドやスコットランド独立運動など、民族主義的な独立運動は、このところ静かである。しかし、その裏で、新たに経済的な理由による独立論がくすぶっている。

フランス国境に接し、緑の山々が連なるバス地方は周辺と言語が全く異なり、かつては暴力的な独立運動が盛んであった。それが鎮静化したのは、寛容な自主徴税権が認められ、経済的な不満が除かれたからである。最近の調査によれば、独立を望むバスの住民はわずか十七パーセントに過ぎない。

カタールニア州(バルセロナ)の本音もバス方式にあるようだが、なにしろスペイン経済の四分の一を占める地域だけに、中央政府が簡単に同意するはずはない。

また長年イギリスの支配下にあったスコットランドは、北海油田の開発を契機として、

スコットランド議会・自治政府の設立を獲得し(一九九七)、二〇一四年には独立の是非を問う国民投票を行った。しかし民族ナショナリズムに流されることなく反対票が五十五パーセントを占め独立は否定された。ところがこの結果が、北海油田の油価下落による財政難と相まって、かえって独立支持率を高めている。

しかも、イギリスがEUから脱退する中で、スコットランドが独立国となり、EUに残留する希望的な選択肢も生まれた。次の独立是非を問う国民投票はブレグジットが完了する前に行われる予定であるが、もしスコットランドが独立すると、もともと独立志向の強かった北アイルランド、ウェールズも追隨するかも知れない。そうなればイギリスの解体である。

一方、独立運動とは逆ではあるが、サウジアラビアに隣接する小半島国カタールが最近サウジアラビア等のアラブ七カ国から断交された。理由はシーア派のイランに対する過度な接近というが、真の狙いは内陸大国のサウジアラビアがカタールをバーレーンのように属国化することにあるようだ。サウジアラビアの面積の百分の一、四国ほどのカタールは、今でこそ二〇〇万人の外国人労働者がい

て国家らしくなっているが、カタール国籍者はわずかに三〇万人に過ぎない。しかし石油、天然ガスの資源に恵まれ、しかも海に向かつて開かれているので、首都ドーハはアラビアの大都市である。内陸国サウジアラビアにとっては、バーレーンと合わせて属領化したいのが地政学的な要求である。

ところで、日本においても独立運動が起きるとしたらどこであろうか。全く非現実的な想定であるが、歴史的に見て沖縄である。本気ではなくとも「独立」をちらつかせて、日本政府を揺さぶるかも知れない。

もちろん、沖縄が「独立」をしたら喜ぶのは中国である。尖閣諸島はもとより、中国を取り囲む海域の大部分が沖縄県であり、瞬く間に中国の影響下に入るであろう。

考えてみれば、一四二九年に成立した琉球王朝は、一六〇九年に島津藩の実質支配下に入ってから、明国や清国の冊封国であり続け、日清戦争までは清国が領有権を主張していた。中国は、おそらく朝鮮半島と琉球を領有化することを長期的な戦略としているに違いない。